

は、日誌をつけ、次の日の準備をし終らないうちに五時になってしまふ。あつという間に一週間がすぎ、とうとう一学期を過ぎてしまった。この間子どもたちの問題をみつめて、どうにかしなくては、と思つているうちに彼らはどんどん変化していつてしまふ。一学期に二、三回私はHの家を訪問した。彼女の横暴さはじつに驚くほどであつた。ちよつと自分の氣にいらぬ事態になると、誰であろうとける、つねる、叩く、ついに手足をばたつかせて大声を出してあばれる。家族の方が「口でいってつたつて絶対かかねかんね」といいながら、私さえ怖くなるほどの声で叱りつけ、叩きつける。子どもの思いがおとなのそれを中心に判断されてひどくきびしくしつけられている。そのおとなの思ひも、この家の複雑な事情と深く結びついているようだ。父母は現在いなく、祖母がHとHの姉を育てていて、近所でも、生活上の問題や、今までの家庭事情から特別な目で見ても、普通な目にとりあつかつていないらしい。家族ひとりひとりの間も、近所の人々との間も、つつけば苦い水の出そうな關係だ。私は母の会合のとき、できるかぎりの対策を、そのおばあちゃんと協力してやってみることに約束した。しかし長い間の習慣は容易に消えない。いくら幼稚園で氣を配つても、この人的条件が変えられるわけもなく、そこから生ずる精神的経済的不安定や不満は、家族ひとりひとりにゆがみを引き起させている。しかし他をおしのけてもしてみつこうとするHの意欲にはたじたとするが、その真剣な瞳の色は、何かを求め訴えている。私の手で、この何もできない手でも、心からできるだけのことをしてあげなくては、と思ふ。現在のままでは彼女の将来を思ふことは暗胆たる氣持である。ああ何とかくして、あのつぶらな瞳が、夢にもえて生々と輝くように。「教育」だけでは

解決できないけれども、その限界の中で、あの家族とともに苦しみ、ともに望みを見出しつつ、私は最善を尽したいと思ふ。
(幼稚園教諭・仙台)

早く字を覚える子どもを

どのように理解するか

長崎 祐子

「先生、まだ字を教えずによろしいのでしょうか。お隣の○○ちゃんは本などをとんどん一人で読みになるそうでございますが——」

「うちの子どもは、もう全部ひらがなを読みます。私ども別に教へませんが、どこからか覚えてまいりました」

面接のおりなどに、たびたびこのような話ができる。幼くして字を読めれば読めるほど、頭がよいと思つている母親がすくなくない。つまり、字を読み始めた時期の早い遅いによつて知能の程度をはかろうとしているようである。そのたびに「ふつう、心理学者は精神年齢が六歳六ヶ月にならなければ完全に読書の準備ができてるとはいえない、といつております。お子さんは精神年齢はもうそれ以上ですが、体力はなんといいつてもまだ四才児ですから、視力や神経系統の発達から考えると、むしろ字を教えることより、そのための基礎を作るといふお心づかいの方が必要と思ひますけれど」と読書のレイディネスについてもつて知っている知識を受け売りするのが常であつ

た。

しかし、就職して一年を経ると、この受け売り説に疑問を持たざるを得なくなった。というのは、私のこの話をよそに、私の受持っている子どもたちは、六歳六ヶ月という年齢を待たず、ほとんど読み書きを始めているのである。これは何を意味するのであろうか。字を早く覚える子どもに問題があるのか、あるいは六歳六ヶ月という心理学者が示す数字に問題があるのであらうか。

この場合問題となることは、子どもの育つ環境である。私の扱っている子ども、すなわち中流階級の家にある子どもの場合にのみいわれることであるのか、一般に現在の子どものような傾向にあるのか。また、母親の教育に対する関心度、兄弟の有無、読書の心を促す事物の有無、読書以外に興味をひく事物の多少、身体的発達との度合、その他種々の条件が原因すると思われる。

次に、六歳六ヶ月という数を結論づけさせた対象となっている子どもは日本人ではないことである。したがって、環境も異っており、身体的発達もいくぶん異っているであろう。また、これらの研究がなされたのは何年か前のことであるから、現在の子どもの条件と一致するか否かは疑問である。残念ながら現在、とくに日本の子どもを専門的に研究した書物を手にすることができない。

このように、書物をそのまま現実の状態において考えるとき起る矛盾について、再考慮しなければならぬことを痛感するものである。

私は、現在の日本における幼児の読書の実態に触れ、地域別に前述の諸問題を考慮しつつ調べてみたいと思っている。そして年少組でありながら、すでに読書に積極性を示す子どもに対し、子どもの

成長を考えながら正しい指導ができるよう勉強してゆきたい。

(幼稚園教諭・東京)

K子ちゃんの経験を通して

毛利倫子

六月のある日、電気のついた保育室で仕事をしていた私が、なにげなく子どもの作品を入れてある戸棚をあげて、キッシー！と跳びのいてしまった。戸棚の奥に光る二つの目、動いている黒いもの、おそろおそろ電気を近づけてみると、そこに正体を現わしたのが昨日から行方不明の黒兎の仔だった。おびえる目、おなががすききっているとみえ元気がない。まもなく人參の葉を夢中で食べはじめた兎を見つめている私の頭の中には、四月からのK子ちゃんの行動がよみがえってきた。あくる日、いつものように登園したK子ちゃんに「昨日先生が仕事をしていたら、戸棚の中で、あけてください」と声が出たのよ。」と話しかけてみると、急に思い出したように手をうって「あっそうです。あのね。兎がどこかへ行くといけな」と思って私が戸棚の中へしまっておいたのです。」と話しました。「そう K子ちゃんしまっておいたの。でも兎さん、戸棚の中は苦しいからもう入れないでくださいって言ってたわよ、可愛そうね。」というとうわかったといった表情でうなずいていた。

三十年四月、二年保育児を受け持ったときのK子ちゃんの記録の一コマで、ここでK子ちゃんを紹介すると、家庭は両親、祖父母、叔